

勝義邦撰「神戸海軍操練所碑文稿」と武岡豊太

高久智広

本誌執筆の依頼を受け、バックナンバーのページを繙くなかで、思いがけず見覚えのある名前に出会った。武岡豊太である(西本昌弘「木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔擦」拓本と命がけの手拓作業」『阡陵』No.82、2021年3月)。

同誌において西本氏が記されているように、武岡は淡路出身の事業家で、度重なる洪水を引き起こし、神戸市街拡大の阻害要因となっていた湊川の付け替え工事を担当し、新開地の開発にも尽力した人物として知られる。また、歴史・文化にも造詣が深く、浮世絵蒐集や勤皇志士の顕彰にも注力し、これらに関する文筆も数多く残している。

私の武岡との出会いは、前職の神戸市立博物館において、2004年に武岡旧蔵の「神戸海軍操練所碑文稿」(以下、碑文稿)の受贈手続きを担当したことに始まる。神戸海軍操練所(以下、操練所)といえは、神戸の幕末維新史を語るうえでは欠かせない存在であり、神戸開港150年記念特別展「開国への潮流—開港前夜の兵庫と神戸—」(2017)をはじめ、同館で開催したいくつかの展覧会で紹介してきた。しかし、これまではその伝来経緯については検討を加えてこなかったことから、本稿では武岡との関係を手掛かりに、その経緯に注目してみたい。

この碑文稿は、本紙152.1×72.5 (cm) の掛幅装となっており(図1)、収納箱には武岡による3つの墨書がみえる。表書の「軍艦奉行海舟勝麟太郎神戸海軍営碑文原稿」、側面の「勝安房守海軍営碑原稿／生島氏贈」、そして蓋裏の以下の文章である(図2)。

是者勝房州の滞留せし神戸の名門生島四郎太夫の家にありしもの、当時これを書せしに年號干支を一年思ひ違ひ、文久三年を二年とせしことを気付き、更ニ改め書したふもの、今諏訪山公園ニある碑となれり、生島氏別野者奥平野祥福寺の西ニあり、房州茲ニ起臥す、薩の一書生来り、謁して門下の人なるもの、我海軍最初の元帥伊東祐享伯なり、神戸港の

観艦式統監として伯者此家ニ府を置き、感慨無量の懐旧談あり、予等伯か有終の襟度ニ承服せしこと記憶を逸せず、元治元年此家ニ於て房州者海軍を詠する長歌を明治六年再海軍古詩長篇を筆す、一隻の屏風となり、予か薦する處、併せ見て我海軍発達史乃資料となすへきなり

大正乙丑春日、於須磨茅屋、

楽山武岡豊識[豊][楽]

武岡旧蔵「薬師寺東塔擦」拓本の箱蓋裏書(西本2021)と同様に、びっしりと碑文稿の成り立ちと意義を認める。ここに登場する生島四郎太夫は神戸村の庄屋をつとめた人物で、幕末期に神戸に滞在した勝海舟と懇意になり、彼に奥平野村(現神戸市兵庫区)祥福寺の西にあった自らの別邸を提供した。この碑文稿はその生島家に伝来したもので、年号・干支を文久「二」年歳次「壬戌」と誤記したのは、海舟の「思ひ違ひ」によるものであり、それを書き改めたものが諏訪山公園にある碑になったという。

神戸海軍操練所の開所は元治元年(1864)5月であり、これに伴って勝は軍艦奉行並から軍艦奉行に昇格し、操練所のトップとなった。石碑の文面を勝が認めたのは同年10月8日である。しかし、一か月後の11月、勝は禁門の変の関係者との繋がりを疑われて罷免され、翌年3月には操練所も閉鎖。石碑は幕府の追及を恐れた関係者により土中に埋められる。勝



図1 神戸海軍操練所碑文稿
勝義邦撰 神戸市立博物館蔵



図2 「神戸海軍操練所碑文稿」箱蓋裏書



図3 諏訪山公園に移設された神戸海軍操練所の碑

の思いを刻んだ石碑が操練所内にその姿を誇ったのは僅か数か月であった。石碑はその後、生島氏によって掘り起こされ、勝がかつて起居した奥平野別邸の庭に移される。そして、大正4年(1915)11月、生島別邸から神戸港を一望できる高台の諏訪山公園の現在地(現神戸市中央区)に、経緯を刻んだ副碑とともに改めて移設されたのであった(図3)。

こうした経緯を記すのは、神戸史談会が発行する『兵庫史談』第24号(昭和2年<1927>)所収の「海軍々營之碑」である。神戸史談会は、明治38年(1905)創立の郷土史研究団体で、大正15年に会報『兵庫史談』を創刊しており、この時の神戸史談会会長が武岡豊太であった。

碑文稿には他に「大正十四年四月三日 維新史料編纂局展観」と記され

た紙片も同梱されている。維新史料編纂局とは文部省維新史料編纂事務局(以下、事務局)のことであろう。事務局は、明治44年に文部省の下に設置された維新史料編纂会の事務を掌理する組織であり、大正期には「史料採訪」に特に注力した。そのために、編纂官らは全国各地に出張したが、なかでも「畿内諸府県が突出して多」かったという。彼らは各地で「関係者と面会し、史料閲覧や故老からの聞き取りを実施」した。(浅井良亮「明治を編む—維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂—」『北の丸—国立公文書館報—』第50号、2018年3月)。

武岡は、昭和5年(1930)神戸で開催された観艦式記念開港博覧会にも碑文稿を出品するなど、自らの持つ情報の提供や史料の公開に積極的であった。おそらく、維新史料の編纂事業にも率先して協力しただろう。

また、箱書の「生島氏贈」「大正乙丑(大正14年)春日」という記載と、同年4月3日の事務局による展観も無関係ではあるまい。武岡は『兵庫史談』第1号(大正15年1月)の序文に、同会は「相当の努力を尽して郷土の研究と兵庫県下の史蹟」の研究をなしており、「永年調査研究してゐる資料を高擲に束ねておく」のではなく、「牛歩的でも」公開していくことが必要だと説く。武岡は神戸史談会の会長であるだけでなく、「大楠公碑の由来」「湊川神社創立の沿革」(いずれも同第19号、1927年7月)、「先山の金石文」(同第28号、1928年4月)などの文章を精力的に同誌に寄せている。彼は、郷土史の掘り起こしにも強い関心をもって取り組んでいたのである。先述の「海軍々營之碑」の文責は明らかでないが、すでに碑文稿を手にしていて武岡が、この記事の作成に関与した可能性も低くない。こうした武岡の姿勢に、生島氏は碑文稿を彼に託すことを決めたのだろう。

碑文稿はその後所有した市民の御好意で神戸市立博物館に寄贈され、現在、同館のホームページ(<https://www.kobecitymuseum.jp>)で関係資料とともに公開されている。武岡が取り組んできた碑文稿の歴史的意義解明のバトンは、今度は現在を生きる我々に手渡されたといえるのかもしれない。